

No.22

ふるさと歴史散歩

With ジャーなる洞南

えびすに

蛭子谷城(本城城)

所在地 大字本城 (字名は蛭子谷)

城跡は八剣神社(本城)の奥一帯の裏山にあり、こは蛭子谷と呼ばれ、今は本城霊園となっていて、山頂には古い祠(写真)がある。北東側には寺ヶ浦池が横たわっていて要塞の地形となっている。

文治元年(1185年)壇ノ浦の戦いの折、源範頼が城(砦)を築いたとされる。



源範頼が兄頼朝から平家追討を命じられ、壇ノ浦の合戦後に戦後処理(平家側領地受け取り)のため、この本城の地に館を築いてしばらく滞在している。吾妻鏡(鎌倉時代の史書)

や太宰管内志(伊藤常足著)などによれば滞在期間はおおよそ9ヶ月間であったと云われている。

城跡から須恵器、青磁器、白磁器など12世紀後半の遺物が出土している。

八剣神社、ご神体が剣であるのは尾張熱田神宮より剣大神を勧請して奉祀し、戦勝祈願をしたことによるもの。

伊藤常足 江戸時代の国学者。筑前国鞍手の人。

花だより 16

諸葛菜 ショカツサイ

「大紫羅欄花・オオアラセイトウ」超難読な和名を持つ「諸葛菜」は江戸時代、観賞用・搾油用に中国から輸入されたあと野生化し、白当たりのよい土手などに「紫花菜」の別名となりカブや大根、菜の花によく似た可憐な紫の花を咲かせます。

諸葛菜の名は三国志の名軍師、諸葛孔明に由来します。孔明は戦地に到着すると、成長が早く、根も葉も茎も、生でも加熱しても食べられる「カブ」を栽培させ、補給の困難な遠征先で



の食糧不足に備えたそうです。実際には観賞用の諸葛菜と食用のカブは別物。しかし、維基百科(中国版ウィキペディア)には中国北部ではごく普通に見られる野菜の一種、若菜と茎は可食とあります。

編集後記

新年開けておめでとうございます。人を思い遣る美しい心「付度」に手垢が付き、不名誉な流行語にされた昨年。正義の味方然としたマスコミの内部こそ質の悪い付度に満ちているように思うのですが…。

流行は世の中を動かす大切な原動力。しかし何が本当に大切な根幹か、着眼点はズレていないか。今年もじっくり見守って行きましょう。旧年中はお世話になりました。本年もよろしくお願いたします。

編集局 江頭保浩 小野るみ

Vol.23

小さなまちかど

バイバイ上海

初めての海外旅行は十九歳の香港だった。就職して一年、新聞広告に「西安」の文字を発見。旅行者にほとんど門戸が開かれていかなかった唐の都・長安に行ける!唐代の書家の楷書に興味があった私の心は一瞬にして彼らの墨跡を刻した石碑のある

西安に飛び、二十三歳の夏、当時としてはかなり高額な九日間の中国旅行に貯金をはいた。

西安はもちろん北京、上海でも外国人は珍しく、いわゆる「黒灰藍」の時代、明るい色柄の服を着た日本人は注目を集めた。紫禁城の玉座も手を触れられる近さで観たし、今では広大な敷地に厳重な囲いを巡らせた始皇帝陵も、芋畑の中の小山のような陵墓の真上をのんびり歩いた。国内線のリフレッ



シメントは、空姐(CA)が巨大なアルマイトのや

かんでサービスしてくれた記憶がある。人々は貧しくとも明るく親日的。上海の書店で見つけた日本語教材の値段を知ると隣の中国人に「英語できる?」と英語で尋ねると、数人の客が「Yes, I can!」と来てくれた。どこでも「山口百恵」について質問され、和やかに筆談を楽しんだ。日中国交正常化からおおよそ十年の頃である。十数年後訪れた中国の変化は凄まじかったが、

地方都市への移動も格段に自由になり、人情も残っていて楽しく、片言の中国語を学び、安宿と航空券だけ予約して足繁く通った。けれど反日を叩き込まれた一人っ子が社会に出るようになる、街も人も殺伐として、渡航する度失望することが増えた。三十数年間楽しかったよ。またいつか行けたら行く



から。バイバイ上海。バイバイ北京。『小さな街かど』は今回で終了いたします。ながらくお読みいただきありがとうございます。